

5. 高病原性鳥インフルエンザ発生に備えた 密閉容器備蓄と備蓄場所の再検討

豊後大野家畜保健衛生所・¹⁾玖珠家畜保健衛生所・²⁾畜産振興課・³⁾大分家畜保健衛生所
○(病鑑)壁村光恵・安藤紀子・(病鑑)武石秀一¹⁾
・里秀樹²⁾・(病鑑)河野泰三³⁾・(病鑑)安達恭子²⁾

【はじめに】平成27年2月現在、本県には186農場4,558,700羽の家きん飼養農場があるが、高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPAI）発生に備えた埋却地を確保できていない7農場344,600羽については、焼却処分も検討している。平成27年9月、「高病原性鳥インフルエンザ及び低病原性鳥インフルエンザに関する特定家畜伝染病防疫指針」（以下、指針）の改正で、密閉容器の備蓄により防疫措置完了が早期になることが期待され、平成27年10月に備蓄の検討を開始し、平成28年3月に備蓄を完了した。しかし、平成30年1月、香川県HPAI発生事例において本県の密閉容器を香川県に搬出した際、積雪により搬出が難航したため、密閉容器の分散備蓄をしたのでその概要を報告する。

【密閉容器の備蓄検討】HPAIの防疫措置完了は、「殺処分」、「死体及び汚染物品（以下、死体等）の処理」、「農場消毒」を終えた時点である。平成27年の指針改正により、「死体等の処理完了」について、「焼却のため死体等を農場から移動させる場合は、死体等を密閉容器に入れ終えた時点で、死体等の処理が完了したとみなすことができる」と追記された。このことから、防疫措置完了が早期になることが期待され、平成27年10月、密閉容器の備蓄検討を開始した。

1. 密閉容器の選定と備蓄量：密閉容器は、ウイルス拡散防止、作業のしやすさ、焼却施設の投入口の大きさを考慮し、X社の45L密閉容器を選択。埋却地未確保農場で最大規模の肉用鶏105,200羽について、1箱当たり8羽収容を想定し、13,150個必要と判明。
2. 備蓄場所：13,150個もの密閉容器を備蓄可能な施設の選定には苦慮したが、県施設A(竹田市久住町)の利用承諾を得ることができ、平成28年3月、備蓄が完了した。
3. 焼却場所：過去、各市町の一般ゴミ処理施設等について調査したが、構造上の問題等があり対応不可であった。平成27年、新たに民間の焼却施設に打診し、1施設については、平成28年、協定締結に至った。

【備蓄場所の再検討】平成30年1月の香川県HPAI発生事例において、国からの要請で、本県の密閉容器6,500個を香川県に搬出することとなった。しかし、搬出当日、県施設A周辺は10センチ以上の積雪があり、トラック到着が遅れ、搬出が難航した。そこで、新たな備蓄場所を検討した結果、積雪等の影響を受けにくい県施設B(豊後大野市三重町)に密閉容器4,100個が収容可能と判明し、平成30年1月末に分散備蓄した。

【まとめ・考察】平成27年2月現在、県内の埋却地未確保農場7農場では焼却処分も検討していた。平成27年の指針改正を期に、密閉容器13,150個を県施設Aに備蓄したが、平成30年1月の香川県HPAI発生事例における本県備蓄の密閉容器の搬出では、積雪等により搬出が難航した。県施設Bへの分散備蓄により、万一、HPAIが発生し、密閉容器を使用することになった際に迅速に搬出でき、早期の防疫措置完了、さらには経営再開が期待できる。